創作ノート

現代のメディア環境における演奏家のパフォーマンス研究
Musician's performance in modern media environment

木村 佳, 三輪 眞弘
Kei KIMURA, Masahiro MIWA
情報科学芸術大学院大学
IAMAS

概要

本作は、オランダ人の作曲家 Jacob ter Veldhuis(以下 Jacob TV) 作曲«Ticking Time»をメディア・アートによるパフォーマンス作品として位置付け、制作したパフォーマンスである。演奏家による、従来のコンサート形式ではない新たなパフォーマンスを提案する。

1. 定義

演奏家を解釈者、媒介者と定義する。本研究において、プロフェッショナル、アマチュアなどの立場は区別しないものとする。

作曲家が書いた曲を解釈し、作曲家と聴衆を媒介する役割という意味であり、本作はこの解釈者としての役割を拡大する試みと位置づける。

また演奏における重要な要素として、後藤英 (2016) が著書の中で挙げている「テンポやリズムを若干変えたりする限られた即興性」を採用する。

2. 背景

既に録音されたサウンドトラックと人間による生演奏を前提とした作品は、電子音楽の歴史が始まった頃より今日まで多数作られている。それらはしかしながら、演奏家による限られた即興性を欠くものであり、誰もが手軽に高音質で録音/再生が出来るようになった現代において、生身の人間がその場で吹くことの意味はあるのだろうか？ と考えた。

そうしたことから、その場で出された音にリアルタイムで処理をする作品も数多く生まれたが、それらの作品はいずれも電力を必要としながら音楽の美を追求するものである。

Jacob TV が 2015 年に発表した«Ticking Time»は、音楽の文脈で捉えると演奏家はサウンドトラックと映像によって決められたタイムラインに沿って吹くという、ただ実行をする者でしかない。しかし、他の電子音楽がテクノロジーを用いて音楽の美を追求するのとは異なり、社会的な問題や題材を扱っている。音楽が直接的に社会的な批判を伴うものに変わってきたという点において重要であるとし、いま取り上げる必要があるのではないかと考えた。

そこで、この作品を機械と人間による表現、「メディアアート」作品とし、メディアアートにおけるパフォーマンスと位置づけることで、演奏家としての作品への新たなパフォーマンスを提案するに至った。

3. 曲について

JacobTV 作曲の«Ticking Time»は、テナーサクソフォン、映像、サウンドトラックの為の作品であり、二人の日本人により委嘱され、作曲されるに至った。福島第一原発をテーマとしているこの曲は、既に放送されたテレビ番組の映像や音声をサンプリングし、素材として用いることで楽曲が構成されている。

楽譜の解説欄に「演奏者だけでなく、鑑賞者に原発などに対する議論を深めてほしい」との記述がある。

4. パフォーマンス JACOB TV の TICKING TIME

4.1. 構成

パフォーマンスは以下の 3 つのパートに分けられる。

1. 吹き真似により«Ticking Time»を全て聴かせるファーストパート
2. 台本に沿ってしゃべるセカンドパート
3. 吹き始めるが途中でサクソフォンのみになるサードパート

ファーストパートは、サウンドトラックと生演奏による音楽作品において、生演奏である必要があるのか？

という疑問から、奏者の足元に置いたスピーカーから鳴る演奏に合わせて吹き真似をし、鑑賞者に対して一度曲全体を示す。

セカンドパートではそのネタばらしと、何故それをするに至ったのか？ この曲は演奏家の即興性や、コンサートという一度限りの場における一回性を損なうものである。しかし媒介者である演奏家として自分はこの作品を取り上げる必要があるとし、この作品を音楽作品ではなくメディアアートとして捉え、パフォーマンスをするものである。という旨の台本を用意し、観客に向けて話す。

最後のサードパートでは、先程のスピーカーに変わって演奏者である自身が吹くことになるが、曲の中盤で擬似的な停電を起こし、マスタースピーカーとプロジェクターの電源を抜く。電力を必要とするそれらが姿を消すことにより、作曲家 Jacob TV の「原発などに対する議論を深めてほしい」を促すことを狙う。

4.2. 配線図及びテックライダー

2019 年 11 月 18 日,19 日に IAMAS にて行われた作品審査での配線及びテックライダーを記載する。

サードパートの擬似的な停電を起こす際、直接電源を抜いても支障がないもの、支障があるものと配線を分けることが、装置を使う上で必要となる。

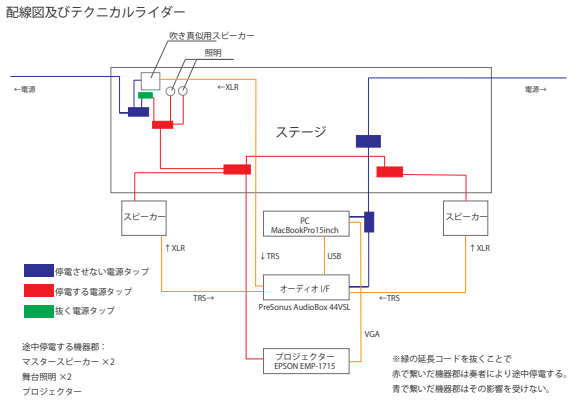

図 1: 配線図

奏者は足元に配置した電源タップを蹴り上げることで、周到に配線しておいた線が全て抜ける仕組みになっている。

5. 考察

筆者はこれまでクラシック音楽の演奏を主な活動としてやってきたが、それらは全て音楽の技法に対して批判をすることで新たな表現を模索したものであった。しかしながら社会的なメッセージを伴う作品も存在し、また«Ticking Time»においては、現代の生活のインフラを支える電力そのものを批判的に扱っている。機械と人間による表現は、まだ拡張及び追求する価値があるものとしながらも、その背後にある電力に対して自覚的かつ批判的になる姿勢を常に持つ必要が、表現者にはあると考えた。

6. 参考文献

後藤英 (2016)『Emprise 現代音楽の系譜から、コンピューター・ミュージック、エレクトロニック・ミュージック、ニュー・メディア・アート、新たなパフォーマンスへの進化』スタイルノート.

大久保賢 (2018)『演奏行為論 ピアニストの流儀』春秋社.

三輪眞弘 (2011) 「中部電力芸術宣言」 Published 2011.3.13. http://www.iamas.ac.jp/~mmiwa/ElectricArt.html 2019 年 11 月 17 日アクセス.

エリカ・フィッシャー＝リヒテ (2009) 中島裕昭, 平田栄一朗, 寺尾格, 三輪玲子, 四ツ谷亮子訳『パフォーマンスの美学』論創社.

山田陽一 (2017)『響きあう身体 音楽・グルーブ・憑依』春秋社.

7. 著者プロフィール

木村 佳 (Kei KIMURA)

サクソフォン奏者。昭和音楽大学器楽学科演奏家コース (サクソフォン) 専攻を卒業後、フリーランスで演奏活動を行う。

現在情報科学芸術大学院大学 (IAMAS) 修士 2 年に在籍。

三輪 眞弘 (Masahiro MIWA)

1958 年東京生まれ。ベルリン芸術大学、ロベルト・シューマン音楽大学で作曲を学ぶ。アルゴリズミックコンポジションと呼ばれる手法で数多くの作品を発表。旧「方法主義」同人。「フォルマント兄弟」の兄。情報科学芸術大学大学 (IAMAS) 教授。

この作品は、クリエイティブ・コモンズの 表示 - 非営利 - 改変禁止 4.0 国際 ライセンスで提供されています。ライセンスの写しをご覧になるには、 http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/ をご覧頂くか、Creative Commons, PO Box 1866, Mountain View, CA 94042, USA までお手紙をお送りください。